WNU Summer Institute 2008 報告(1/2) (7/17 の原産新聞から)

第2437号　(第三種郵便物認可)　原子力産業新聞

21世紀の生存に原子力の役割を学ぶ

世界原子力大学の夏季セミナー報告

世界原子力大学（WNU）の二〇〇八年夏季セミナーが、今年はカナダの首都オタワで開催されている。今年のセミナーは四回目、気候変動問題から人材育成まで、原子力を取り巻くグローバルな課題を世界の約百名の若者が七月五日から六週間、生活を一緒に過ごして共に考え議論する。それを側面からサポートするファシリテイター（調整役）として参加している小西俊雄氏（日本原子力産業協会）から、現地レポートの第一報が届いた。

◇　◇

夏季セミナーの全体像は昨年、講師として参加された佐藤忠道氏（日本原子力発電理事）の記事に詳しい（原子力産業新聞平成十九年十月二十六日号）が、初日冒頭での世界原子力協会（WNA）のJ・リッチ事務局長の講演から「WNUのねらい」を簡単に振り返ってみる。

「（WNUは人類の）実験のなかの（原子力人の）実験」と題し、「産業時代に入り、人口増・エネルギー需要増と資源有限の中で、人類が生き延びるために社会全体が協力できるかの実験に二十一世紀は入っている。その中で、エネルギー界が、特に原子力界が如何に協力してその果たすべき役割を担うか、これからの指導者を育てることができるかの実験がWNU、その実験の成否は近い将来、諸君が示すのだ」

このセミナーの最大のねらいは、「課題を議論すると。講師はその課題を提起し、ファシリテイターはその議論を援けるのが役割だ。いずれも「課題への解決策を与える必要はない、与えてはいけない」と事務局からの指導書には明記されている。

したがって、講師は現代原子力界を引っ張る各国、各分野のトップ級が務める。ファシリテイターは課題の背景を知り、国際経験に富んだ者から選ばれる。ただし、扱う課題は広範であり全ての課題に精通していることは不可能だし、その必要はない。「課題を議論するのを援ける」のが役割だが、それも実はそう簡単ではないのだが。

今年の参加者は四十か国からの百名（うち女性二十五名）、例年とほぼ同様。所属はおおむね産業界六〇%、研究機関・学界と官界がそれぞれ二〇%だ。日本からの参加はわずか一名、「少ない」ことで例年同様。「残念」以上に「問題である」との私見を付け加えておきたい。

午前は「講師による課題解説と問題提起」。その講師は「気候変動に関する政府間パネル（IPCC）」「国際原子力機関（IAEA）」「アレバ社」など多彩な組織の幹部級だ。日本からは電力中央研究所の七原俊也・上席研究員が「新エネルギー」について講演。その課題は毎日変わる。

午後は十名の少グループに分かれて、「参加者同士の議論」を行うファシリテイターがそれを援ける。ファシリテイターはセミナー期間中定期的に会合を持ってその「援け方」を自己評価しつつ、必要な環境を整備する。私のグループは、九か国から十名で、出身分野は産・学・官それぞれ七、一、二名。

ときに「特別講演」がある。九日はグリーンピース創設者の一人、カナダ人パトリック・ムーア氏を迎えての夕食会だった。「世界の政治家が毎日環境について語るほど、環境への関心を高めて私の前半生は目的を達した。環境主義者が環境至上主義で生存のためのエネルギーを忘れたときに、私は後半生の仕事を決めた」と、なぜ原子力が必要と考えるに至ったかを熱っぽく語り、九十分間、誰もが食事を忘れて聴き入っていた。

セミナー第一週（七～十一日）は、「世界的状況」と題して世界エネルギー需給、気候変動、非原子力エネルギー、原子力政策、原子力の非エネルギー利用を日替わりで議論した。講演後の質疑時間に参加者からの質問が少ないことを懸念したが、杞憂だった。講演者も答えに窮するほど、核心を突く質問も出るほど活発だった。午後の討議ではグループを引っ張るリーダーが自然に現れ、自発的に議論が進んだ。ときどき質問を挟んで議論の方向を助ける位で、私の出る幕はほとんどない状況から始まった。言葉の壁を感じる者も確かにいたが、私のグループはアメリカ人でもカナダ人でもなく、オランダの青年とドイツの女性が引っ張った。

以下週単位に「原子力産業」、施設訪問を挟んで「広報」「放射線防護」「原子力経済」「原子力教育と知識管理」と続く。テーマの広範さがお分かりいただけるだろう。どれ一つでも国際会議の立派なテーマになり得る。

議論を通して青年たちは各分野の今の課題を知り、他の若者の視点、考え方を知り、自分の国を見直し、自分自身への課題を見つけていくだろう。それを期待させてセミナーは始まった。次回はセミナー後半の成果への期待のほか、施設訪問、課外活動などについて報告したい。

みんなで止めよう温暖化
チーム・マイナス6%
原産協会はチーム・マイナス6%に参加しています。

WNU Summer Institute 2008 報告(2/2) (8/21 の原産新聞から)

第2441号　（第三種郵便物認可）　原子力産業新聞

世界原子力大学セミナーは 大学を超える「プロ意識の鍛錬場」

前回（七月十七日号）では、〇八年夏季セミナーの全体と「走り出した」状況の概要を報告した。今回はセミナーでの議論過程と成果への期待、日本との関わりに関する私見などについて報告する。

（小西俊雄記）

まず、講義・議論環境。会場はカナダの大学構内のITビル。IT環境が整備されていてセミナー専用ウエブも無線LAN環境で連営、ほとんどペーパーレスである。夏期休暇の時期でほぼ貸切り、専属のITテクニシャンが付くなど、恵まれた環境と言って良い。

二週目は「原子力産業」として核燃料サイクル全体をカバーした。どれも関心は高いが、廃棄物・再処理の部分が特に議論が高かった。印象的だったのは「韓国の見え方」である。小グループでの討議、議論結果を持ち寄る全体セッションでも見える形で良く発言する。フランス、カナダの技術者は自国の力、自信を熱っぽく語る。これから指導者になっていくであろう各国の若者がそれを新鮮な印象として持ち帰る。このような「見える日本」は出てこない。参加者の少ないことの欠点である。「置かれていく日本」を感ずるようでほぞをかむ。

参加者間に、より多くの交流が生まれるよう四週目からグループが再編された。私の預かる第二のグループ員は産・学・官から七・二・一名である。これとは別に、特定の課題に共通の関心を持つ参加者が集まって議論する第三の「課題グループ」も編成された。今回は、①高レベル廃棄物国際処分場②核燃料再処理の得失③原子力発電導入・拡大の課題④多国籍管理のエルバラダイ構想⑤原子力発電と温暖化対策⑥広報⑦教育訓練・人材育成⑧資金調達の八課題を十グループに分け、私は③の一部を担当した。いずれのグループも、参加者同士で議論を進め、提案を導く。報告者も自分たちの中から選んで、報告をまとめる。

「日本からの参加者が少ないのは残念以上に問題」との認識を前月号に書いた。夏季セミナーの大きな狙いに「参加者同士のネットワーク環境を作らせる」ことがあることと密接に関係する。関係者からの聞き取りでは、「過去の参加者の五割以上が日常の情報交換、意見聴取にネットワークを継続利用している」ようだ。「参加者が少ない」ということは、「将来の指導者、プロジェクト・マネジャー仲間が作る情報交換ネットワークに加われない」状態を意味する。急速に市場がグローバル化する中で、特に日本の産業界の今後を憂慮する気持ちをぬぐえない状態でセミナーは終幕に入った。

もちろんWNU夏季セミナーだけが交流ネットワークの足場ではないが、若いうち（参加者資格は三十五歳以下）に知り合って続く交流は価値が高い。特定の機関への派遣で知り合う関係より遥かに多重で多彩な接点を持ち、同じ目線で突っ込んだ議論をする機会である。参加者の所属する組織を見ると約七割を産業界が占める。日本からは参加者自体、中でも産業界からの参加が少ない。日本からの参加者総数は過去四回で六名、うち「産」は僅か二名である。ちなみに韓国は今回だけで八名（うち産が四）を参加させている。有能な若者がより多く参加できるよう、特に産業界の理解をお願いしたい。夏期の六週間なら、業務への影響もミニマムだろう。

参加者が若者といっても、立派な職業人である。活発な議論もむべなるかなである。当然、「英語」が必須の条件となる。大学と銘打つが「学生」は二人だけ、一人は国立研究所で仕事を受け持つ「半職業人」である。「参加者は研修員ではなく、技師クラス」といえばそのレベルが分かっていただけるだろうか。本稿を「大学を越える」と題した理由である。講師からの呼びかけも「学生諸君」ではなく、「プロフェッショナル諸君」である。

セミナー終幕にWNAのA・ホワイト会長（GE会長&CEO＝写真のスピーカー）が講演した。「原子力は挑戦の価値ある将来である。これから諸君が役割を担うリーダーの立場は、楽ではないがやりがいがあるものだ。多くの仲間を持つことの大事さを知るはずだ、それを援けることをWNUは目指している」と結びで語っていた。

施設訪問は七月後半。ダーリントン原子力発電所、AECL社（設計部門、研究所）、探鉱開発のカメコ社、B&W社を訪ねた。多くの参加者には、関係の薄い重水炉関係に関心の深さは分かれたようである。

セミナーが始まった七月初め、「原子力」を熱っぽく語る若者に新鮮な感動を覚えた。自分が原子力を始めたころこんな顔、こんな眼をしていただろうか。

来年は英国オックスフォードで開催される。一人でも多くの日本の若者が参加し、原子力国際人の育つことを期待したい。そして近い将来、日本でも夏季セミナーが開催されることを願って稿を閉じる。

なお、WNU関連情報（特にSummer Institute関係）を紹介するウエブを原産協会ホームページ内に近く開く予定。（了）

みんなで止めよう温暖化
チーム・マイナス6%
原産協会はチーム・マイナス6%に参加しています。